令和八年度入学者選抜試験問題　国語

注意
1　解答は、答案用紙の指定欄に記入しなさい。
2　受験番号を答案用紙その一、その二の指定欄に記入しなさい。
3　開始の指示があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
4　この問題冊子は、9ページまであります。問題冊子・答案用紙の印刷の不鮮明、ページの落丁・乱丁等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
5　この問題冊子は、試験終了後持ち帰ってください。

次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。

季節が記憶をするということがあるのだろうか。ある夏、山手線の車窓から差し込む昼の烈日に照らされバクゼンたる明かりに満ちた車内で私は、ふと何かが自分の身体をツラヌいて芯から胸を締めつける切ない気持ちがするのを感じた。どういうわけか、私はそれが①八十年前の夏の記憶であるという感覚にとらわれた――いや、おかしい。私はその苦しみをこの身で体験していない。ただ、そうとしかいいようのない確信が私の内に生じ、もうそれ以外には考えられなくなった。

私は最初それを土地の記憶であると思った。東京のこの場所が戦争を憶えているのだと。それは、今になって振り返ってみれば、幼い頃に見たアニメや映画あるいは写真や映像を通じて、自分ではもはや意識的に分析することのできないほど心の深いところで、東京大空襲が私にとって戦争の原初的なイメージになっていたのかもしれない。ただ、あの夏の日の感覚にはそれとはまた別の何かもあるように思われた。それは私個人の記憶やイメージというよりは、そうした私的な心の輪郭を超えて広がる記憶にも思われたのである。それに、私たちがこの戦争の記憶として伝承してきたのは東京の空襲のみならず、広島・長崎の原爆も沖縄の地上戦も、そして世界中の様々な場所における無数のかぎりない悲しみもある。私をとらえた感覚はそのことを含むものでもあったように思う。私は、土地が憶えているということもたしかにあるのではないかとは思うが、しかしこのときは夏が憶えていたのだと思った。

つまりここで季節が記憶をするというのは、何か私の経験したことが自分の中でそのときの季節と結びつき、毎年その季節がおとずれるたびおのずと思い出されるということではなく、文字通り季節が記憶をしているということである。あたかも人が何か大切なことを自分の頭や胸の裡にしまっておくようにして、季節がおのれの経験したことをその心の中に留めているということである。だから私が経験しなかった、たとえば私が生まれる前の出来事も、むろん私は憶えていないが、季節はそれを憶えているということがある……。

②しかるに近年の異常気象はどういうことであろう。気候変動によってこれまでの季節感は薄れ、季節に託して思いを語る想像

力もやがては失われてゆくのであろうか。そしてめぐらなくなる季節とともにその記憶も忘れ去られてゆくのであろうか。

一方、③この気候危機の主たる要因のひとつとされるテクノロジー、すなわち西洋近代技術は、近年ますます異常なまでに記憶力を高めている。人工知能はその象徴である。膨大な量の過去のデータを学習し、それに基づいて文章やイラストや動画を生成するこの機械は、記憶の継承をめぐる自分の理解に再考を迫るように思われてくる。そもそも人工知能を生み出した西洋近代において技術はしばしば、人間の記憶を文書や録音や映像などの記録に外在化することで個人を超えて共有し、次世代がそれを受け継ぎ内面化することで、人間が歴史的に発展してゆく条件として考えられてきた。もちろん種々の文化的イサンが個人を超えた記憶を紡ぎ、感性を分かち合う共同体を養ってきたという点だけであれば、世界中の様々な文化に見られるであろう。しかしそのなかで西洋近代が特殊なのは、それが進歩主義的で啓蒙主義的な歴史意識を形成したことであり、そしてこれが一面において植民地主義的で民族主義的な歴史意識でもあったことは周知の通りである。近代化とは、テクノロジーを取り入れることで、テクノロジカルに構築されたこの歴史意識をも避け難く取り込み、そしてその世界史の主役の座をめぐり凄惨さを増して繰り返され続ける戦争に飲み込まれてゆくことでもあった。それゆえ平和をめざす道においては、現代文明に一般的なこの歴史意識をおりなすかたちで記憶を媒介してきた、テクノロジーの本質を徹底的に問い直さなければならないと私は思う。それは記憶の継承と向き合うことでもあろう。

戦争の記憶を継承するということは、もう戦争をしないということでなければならない。記憶の継承とはたんに何かを暗記して想起できるようになればすむことではない。そして④それはテクノロジカルな記憶に対してただ季節の記憶なるものを立てればそれで解決することでも全然ない。私は、記憶の継承とは最終的には、それを伝える人と伝えられる人との、まごころの交感によってはじめて成り立つものであると信ずる。それは人と人とが出会い大切な時をともに過ごすなかで起こることもあろうし、たとえ時間や空間をヘダてていても思いのこもった何かを介して起こることもあるであろう。それは文書や録音や映像かもしれないし、日々の暮らしの道具かもしれないし、色々のものが媒体となりうるであろう。季節もそうなのかもしれない。しかし曖昧な感覚によって、自分が経験したのではない記憶を思い出したとただ何となく思い込むというのは、人々が記憶の継承にかけ

てきた誠意や努力への尊敬を欠き、ともすると真実を歪(ゆが)めることで踏み躙(にじ)ることにさえなりかねない。私はそれを望まない。それなら季節の記憶なるものは、それとは違うどのような意味があるのであろうか。

あの夏の日、私はまるで季節から一通のたよりが届き、それに応答しなければならなくなった。私は何か答えなければならないが、その答えも、それを届けるべき季節の記憶も、まだ見つからない。私にとってそれはイゼン[e]として問いかけにとどまる。あるいは平和の願いをかけることに。

（原島大輔「夏のおとずれ」による）

問1　傍線部aからeまでの片仮名の部分を漢字に直しなさい。

問2　傍線部①に「八十年前の夏の記憶であるという感覚」とありますが、筆者はこの自分の感覚についてどのように分析し、述べていますか、説明しなさい。

問3　傍線部②に「しかるに近年の異常気象はどういうことであろう。」とありますが、この第四段落が論の道筋のなかで持っている役割は何ですか、前後の内容に触れつつ説明しなさい。

問4　傍線部③に「この気候危機の主たる要因のひとつとされるテクノロジー、すなわち西洋近代技術は、近年ますます異常なまでに記憶力を高めている。」とありますが、筆者はどのような点でテクノロジーを取り入れた近代化が問題であると言っていますか、説明しなさい。

問5　傍線部④に「それはテクノロジカルな記憶に対してただ季節の記憶なるものを立てればそれで解決することでも全然ない。」とありますが、筆者はなぜこのように言っていますか、説明しなさい。

（このページは白紙です。）

二　次の文章は、『源氏物語』の一節です。文中の「荒れたりし宮」のあるじである末摘花は、父宮と死別し光源氏の庇護も途絶え、古く荒れた邸宅で女房たちと生活に困窮して暮らしています。これを読んで、あとの問に答えなさい。本文中の＊は本文の後に注があることを示しています。

もとより荒れたりし宮のうち、いとど狐の住み家になりて、疎ましう、け遠き木立に、梟（ふくろう）の声を朝夕に耳慣らしつつ、＊人げにこそ左様のものもせかれて影隠しけれ、＊木霊など、けしからぬものども①所を得て、やうやう形をあらはし、ものわびしきことのみ数知らぬに、＊まれまれ残りてさぶらふ人は、「なほいとわりなし。＊この受領ども②、おもしろき家造り好むが、この宮の木立を心につけて、『＊放ちたまはせてむや』と、＊ほとりにつきて案内し申さするを、③左様にせさせたまひて、いとかうもの恐ろしからぬ④御住まひに＊思し移ろはなむ。立ちとまりさぶらふ人もいとたへがたし」など聞こゆれど、「あないみじや。人の聞き思はむこともあり。生ける世に、しか＊名残なきわざはいかがせむ。⑤かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住み家と思ふに慰みてこそあれ」とうち泣きつつ思しもかけず。

御調度ども、いと＊古代に慣れたるが昔様にてうるはしきを、＊なま物のゆゑ知らむと思へる人、さる物＊要じて、わざと＊その人かの人にせさせたまへると尋ね聞きて案内するも、おのづからかかる貧しきあたりと思ひ侮りて言ひ来るを、例の＊女ばら、「⑥いかがはせん。＊そこそは世の常のこと」とて、取りまぎらはしつつ、目に近き今日明日の見苦しさをつくろはんとする時もあるを、いみじう諫（いさ）めたまひて、「＊見よと思ひたまひてこそ、＊しおかせたまひけめ。などてか軽々しき人の家の飾りとはなさむ。⑦亡き人の御本意違はむがあはれなること」とのたまひて、さるわざはせさせたまはず。

（『源氏物語』蓬生による）

注　人げに…せかれて—人の気配に…阻まれて。　木霊—樹木に宿る霊。　まれまれ残りてさぶらふ人—貧しくても末摘花のもとに残っている女房のことを指す。　この受領ども—末摘花に仕える女房と交渉をしている裕福な受領たち。　放ち—邸宅を手放すこと。　ほとり—末摘花のまわりにいる者。　思し移ろはなむ—「思し移ろふ」は転居を考えること。　名残—父宮が生きていた時の名残のこと。　古代に慣れたるが—古風で使い古してはいるが。　なま物のゆゑ知らむ—生半可に由緒を尋ねて趣味人ぶろうとすること。　要じて—所望して。　その人かの人—当時の名工であるこの人、あの人。　女ばら—女房たち。　そこそは—そのようなことは。　見よ—調度品をあなたが使いなさいということ。　しおかせたまひ—作らせておかれた。

問6　傍線部①「所を得て」、傍線部⑥「いかがはせん」を現代語に訳しなさい。

問7　傍線部②「の」、傍線部④「ぬ」を文法的に説明しなさい。

問8　傍線部③に「左様にせさせたまひて」とありますが、女房たちが末摘花に何を求めたものか、説明しなさい。

問9　傍線部⑤の「かく恐ろしげに荒れはてぬれど、親の御影とまりたる心地する古き住み家と思ふに慰みてこそあれ」とあるのは末摘花の発言です。末摘花はどのようなことを言っていますか、説明しなさい。

問10　傍線部⑦に「亡き人の御本意違はむがあはれなること」とありますが、この言葉の意味を明らかにしながら、調度品に関する末摘花の考えを説明しなさい。

三　次の文章を読んで、あとの問に答えなさい。なお、設問の都合で、返り点・送り仮名を省略した部分があります。本文中の＊は本文の後に注があることを示しています。

＊三国兵至レ＊函、＊秦王謂ヒテ＊楼緩ニ曰ハク、三国之兵深シ矣。①寡人欲割＊河東而a講、何如ト。対ヘテ曰ハク、夫レ割クハ河東ヲ大費也モ、免レシムルハ国ヲ於患ヒヨリ、大功也。此レ＊父兄之任也。②王何不ルトシテ召シテ＊公子氾ノシヲ而問ハ焉。王召シテ公子氾ノシヲ而告グレ之ニ。対ヘテ曰ハク、講ズルモb亦イ悔、不ルトシテ講ズルモ亦イ悔。王今キテ割キテ河東ヲ而ジ講、三国帰ラバ、王必ズ曰ハク、三国固ヨリ且ツ去ラント矣。吾特タダ以テ＊三城ヲ送リシノミトレ之ヲ。不シテ講ズ、三国也ヤ入レバ函ニ則チ国必ズ大イニ＊挙ゲラレ矣、王必ズ大イニ悔イテ曰ハク、不レバ献ゼ三城ヲ也ト。臣故ニ曰ハク、③王講ズルモ亦イ悔、不ルトシテ講ズルモ亦イ悔。王曰ハク、為モシ我イナバ悔也、cイ寧ロ亡ウシナヒテ三城ヲ而ジ悔ユルトモ、無カラン危フクシテ乃チ悔ユルコト。寡人＊断ズレ矣。

（『韓非子』内儲説上による）

注　三国—戦国時代の斉国、魏国、韓国のこと。　函—函谷関。秦国が築いた関所の名。今の河南省霊宝県の南西にあった。　秦王—戦国時代の秦国の王。　楼緩—人名。秦国の宰相。　河東—土地の名。南流する黄河の東の土地の意。今の山西省の西部地方を指す。　講—和睦する。　父兄之任—一族の責任、仕事。　公子氾—「公子」は諸侯や貴族の子どものこと。「氾」が秦王の子であるのでこのようにいう。　三城—三つの町。「城」は周囲に城壁を巡らした町のこと。　挙—攻め落とす。奪う。　断—決める、定める。

問11　傍線部a「何如」、b「亦」、c「寧」の読みを、送り仮名も含めてすべて平仮名で記しなさい。

問12　傍線部①は「寡人は河東を割きて講ぜんと欲す」と書き下します。これに従って返り点と送り仮名を加えなさい。

問13　傍線部②「王何不ルトシテ召シテ公子氾ノシヲ而問ハ焉。」をすべて平仮名で書き下し文にし、現代語に訳しなさい。なお、書き下し文は現代仮名遣いを用いてもかまいません。

問14　傍線部③「王講ズルモ亦イ悔、不ルトシテ講ズルモ亦イ悔。」とはどういうことですか、それぞれの「悔」の内容を具体的に示しながら説明しなさい。

問15　X にあてはまる漢字を次の中から一つ選びなさい。

「召」「患」「帰」「講」「悔」

令和八年度入学者選抜試験答案用紙　国語その一

問 5	問 4	問 3	問 2	問 1	
				d	a
				e	b
					c

受　験　番　号

小　計　1

令和八年度入学者選抜試験答案用紙　国語その二

二

問6	問7	問8	問9	問10
①	②			
⑥	④			

小計 2

三

問11	問12	問13 書き下し文（平仮名）	問13 現代語訳	問14	問15
a	寡人欲割河東而講				
b					
c					

小計 3

受験番号